

『ケベック詩選集 北アメリカのフランス語詩』
 (立花英裕・真田桂子編訳 後藤美和子・佐々木菜緒訳)
 彩流社、2019年

河野美奈子
 KONO Minako

本詩選集は、2007年出版の『ケベック詩—その起源から現代まで』(*La Poésie québécoise : Des origines à nos jours*, 2007)を底本としている。そこから厳選されたケベックを代表する詩人、さらに『ケベック詩—その起源から現代まで』では取り上げられなかった詩人を新たに加えた、36人の詩人の作品を載せた濃縮された内容の詩集となっている¹。

今回紹介されている詩人たちは日本語では紹介されることのなかった作家たちが多く扱われており、その点においても本書は日本におけるケベック文学需要において非常に重要な位置付けとなる書物と言えるだろう。刊行にあたり先の『ケベック詩—その起源から現代まで』で編纂を行い、本書の詩人の選定にもあたったケベック詩の研究者であり、詩人でもあるピエール・ヌヴー (Pierre Nepveu) による序文が新たに付け加えられた。ヌヴーによって語られるきわめて示唆に富んだケベック詩の変遷を辿ることにより、われわれはケベックにおいて文学とくに詩がケベックの歴史や政治と密接な関わりを持っていることを知ることになる。また、簡潔な経歴と主要作品の特徴についての解説が各詩人に付されており、読者が作品を味わううえで助けとなる情報が記されている。本書評では詩選集内の全作家に言及することは紙幅上難しいが、本書の全体像を把握するための幾人かの作家と彼らの作品を挙げていきたい。

本書は19世紀にケベックの愛国的文学運動の中心人物であるオクターヴ・クレマズィ (Octave Crémazie) の詩から始まる。彼の詩「ポトワトミ族の男」では、先住民の子供の目から祖先の森、そしてそこにはためく「白人の幟」を見つめる風景がうたわれている。フランスの幟に対する愛国心を示しながら同時に他人の土地に住むという不安定な帰属意識は、当時のケベックの人々に共通する思いであったと考えられる。

クレマズィとほぼ同時代のルイ・フレシェット (Louis Fréchette) は、自然の厳しさと美しさ、そしてそこに生きるフランスからやってきた集団として

のケベック人を詩にしている。そのため個人として、内省的な詩を作るエミール・ネリガン（Émile Nelligan）の登場はケベック文学界において非常にセンセーショナルであったことが本書では示されている。ほぼ全ての作品を10代のうちに創作したネリガンは、若くして精神を病み長い入院生活をしいられた。彼が精神病院に入院する前に作られた「酒のロマンセ」では、酒が酌み交わされ、陽気な雰囲気の中若さを享受している喜びと同時に、若さゆえに詩人としての恐れ、不安が現れている。

この時代においてネリガンと並んで称されるのはサン＝ドニ・ガルノー（Saint-Denys Garneau）である。ケベックの名家に生まれた彼も若いうちにその才能を発揮するが、31歳という若さでこの世を去っている。ガルノーについて、ヌヴェーは序文のなかで彼の詩集を「ケベックにおける近代詩の本格的な始まり」と評しており、この詩人の登場によってケベック文学は新たな展開を迎えることになった。本書に収録され、彼の代表作でもある「連れの者」では「私は喜びのすぐ脇を歩いている」という言葉が記され、「喜び」を求め、交わることを願いつつも決して交わることのできない自己自身が描かれている。彼の詩全体には「喜び」と「死」が横たわっており、ガルノーの詩には彼の内的不安定さがあらわになっている。

詩人であり小説家でもあるアンヌ・エベール（Anne Hébert）は1953年に詩集『王の墓』（*Le Tombeau des rois*, 1953）を発表した。小説では教会を中心とする旧態依然とした閉鎖的社會をテーマとしている彼女だが、詩では「血」や「漆黒の骸骨」といった言葉を用い、恐怖をより生々しい形で表現している。

第2次世界大戦後はフランスのシュルレアリスムに影響を受けた詩人が登場する。ジャーナリストでもある詩人ポール＝マリー・ラポワント（Paul-Marie Lapointe）は散文詩のなかに「殺されたムール貝の杯の中」や「ある町の飲み込まれた唇」といったシュルレアリスムの表現を用いた。彼は、こうした表現を「ケベック的意識へと統合することに成功した」作家であると本書では評されている。

1953年はケベック詩の歴史において重要な年である。エベールをはじめとして数々の詩集が発表されるとともに、ガストン・ミロン（Gaston Miron）が代表となった出版社「エグザゴンヌ社」が設立された年だからである。同出版社には多くの詩人が集まりケベックを代表する詩の出版社へと成長した。ミロンの詩「複数のアメリカと共に歩む者」と「十月」は、1950年代に台頭したケベックナショナリズムに対する宣言とも言える。「ケベックスラ／

私の苦き地／麗しき土地」とうたわれるケベックは、ヌーヴェル・フランスと名づけられたこの地に移り住み、長い忍耐の時を過ごした祖先たちの土地であり、ミロンによる神話化された土地であるとも言えるだろう。そして「蘇生の地」であるケベックの大地で戦い、自らの土地を勝ち取ろうと高らかに呼びかけている。

ミロンとともにケベック人のアイデンティティの確立に奔走し、1960年代に活躍したジャック・ブロー (Jaques Brault) も忘れてはならない。彼の「亡き兄と祖国に捧げる組曲」はケベック詩の古典とされている。第2次世界大戦中にシリアで亡くなった兄ジルに捧げられたこの詩では、孤児とみなされたケベックの民の苦難が神話と重ね合わされて、一大叙事詩として描かれている。それは単なる嘆きではなく、新たなケベックの誕生を待つ喜びでもある。ミロンやブローが活躍した1950年代から60年代はケベックのアイデンティティの危機とともにケベック人が自らの「故郷」を作り上げようとした重要な転換期であったことが指摘されている。

1960年代後半から活躍したニコール・ブrossard (Nicole Brossard) は、ミロンに代表されるようなケベックナショナリズム運動を先導する詩人たちとは一線を画して活動した詩人である。彼女はのちに高まりを見せたフェミニスト運動とも深く関わっている。彼女の詩「六つの震えについての仮想」では詩的な創造空間が「感覚的・官能的」表現で描かれている。

19世紀から20世紀にかけての詩人たちは、濃淡はあるもののケベックの歴史や政治と密接な関係をもっていたことは、ヌヴェーの序文で明確に指摘されている。彼らは、植民地であった土地とフランスにオリジンを持つ自らのアイデンティティとのあいだで、絶えず対話を続けていたとも言える。

そして20世紀から現代にかけてはフランスとは別のルーツを持つ人々が、ケベックで自らの詩を発表している。本書では、ジョエル・デ・ロズイエ (Joël Des Rosiers) の詩が収められている。ハイチに生まれた彼は、デュヴァリエ独裁政権に批判的だった家族と一緒に、十歳の時にケベック州に移住した。医師と詩人、そして批評家と様々な側面を持っており、「医学と精神分析、文学を密接に結びつける詩的言語を開拓」し活動している。「カイ州の町」では、故郷の町レ・カイ (Les Cayes) が想起され、自身の誕生の瞬間をうたう描写は医師としての作家ならではの表現方法である。

また先住民の詩人が取り上げられていることも非常に重要である。特に本書は底本となった『ケベック詩—その起源から現代まで』では載せられて

いなかった先住民作家が3人追加されている。彼らの祖先はフランス人入植者がケベックの大地に降り立つよりも前にこの地に住んでいたが、歴史のなかで常に周縁的な存在として置かれていた。20世紀でもフランス語で書く先住民作家は存在していたが、彼らが目覚ましい活躍を見せるようになったのは今世紀に入ってからである。1947年に生まれたジョゼフィーヌ・バコ（Joséphine Bacon）は2009年に「フランス語とイヌー語の二言語を並記した」詩集『メッセージ棒』（*Bâtons à message*, 2009）を発表した。バコンは寄宿学校に入れられ、祖先との記憶を分断された経験から、「イヌー族の年長者たちから伝統的な物語や知恵を聞き取り」、フランス語へ翻訳し、イヌー族の子孫へ、さらにケベックや世界の人々に伝えることに努めている。『メッセージ棒』で書かれた詩に通底するものは「北が私を呼んでいる」から始まるように祖先の記憶をたどろうとする思いとともに、詩は今を生きろというバコンの強烈なメッセージである。1991年生まれのナタシャ・カナペ・フォンテーヌ（Natasha Kanapé Fontaine）はバコンと同じイヌー族出身である。彼女は、移動生活の最中に自然のなかで生まれたバコンとは異なりベ＝コモー（Baie-Comeau）の居留地で生まれた。彼女が描くのは、先住民居留地の世界である。「宣言する わが大地よ」では居留地での困難な生活を描き、「大きな松明を手を持って／居留地の建物に火をつけよう／法令文書とともに」と居留地からの自分たち民族の解放をうたっている。

詩人の各作品が非常に魅力的でわれわれの想像を掻き立てるのは言うまでもないが、19世紀に活躍したクレマズイの詩から始まり、ナタシャ・カナペ・フォンテーヌで終わる本書は近・現代ケベック詩の変遷を大きな見取り図として追うことができるのも特徴である。奇しくもクレマズイが「ポトワトミ族の男」で先住民の大地に自らの国が建っているという不安定さを描いていたが、ハイチ出身のジョエル・デ・ロズイエや先住民のナタシャ・カナペ・フォンテーヌの活躍によってケベック詩には新たな局面が示されているように、アイデンティティの不安定さそのものが多様性のあり方へと変化していった様がこの詩選集から読み取ることができる。それはケベックが掲げる間文化主義によるところが大きいのが、間文化主義への挑戦はまだ道半ばである。この挑戦が続く限り、ケベック詩の世界には多様な側面を持つ詩人が登場し、豊かな作品をわれわれに見せ続けるだろう。とはいえ、こうした観点に限定されない汲み尽くせない魅力に満ちたケベック詩の世界をみせてくれる本詩集は、ケベック文学の豊かさを読者に伝えてくれる

ものとなっている。

(この みなこ 立教大学教育講師)

注

- 1 Laurent Mailhot, Pierre Nepveu, *La Poésie québécoise : Des origines à nos jours*, Montréal, Éditions Typo, 2007.